

もっと知りたい!

At a Glance

あつとあぐらんす 一知ることからはじめよう

2016
Vol.1

2016年2月
発行号



世界規模で強制移動が増えている

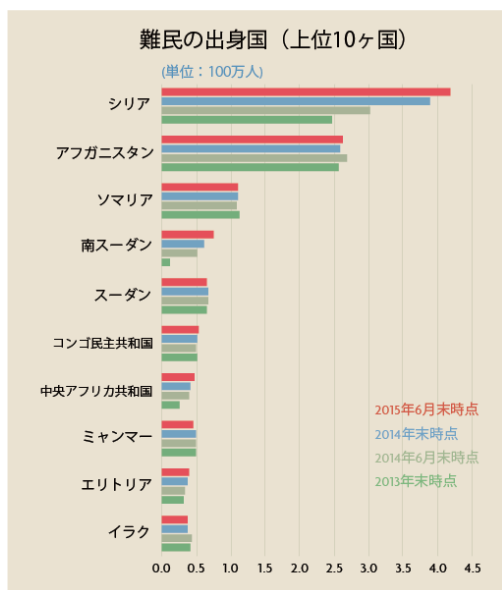
シリアをはじめとした紛争が収束の兆しを見せない中、欧州を目指して地中海を渡った人が2015年の1年間で100万人を超えた。

UNHCRは、2015年12月に「2015年上半期の統計報告書 (Mid-Year Trends 2015 report)」を発表した。2015年1月から6月末までに紛争や迫害によって移動を強いられた難民、庇護申請者、国内避難民が急増していることを示している。

これによると、2014年1950万人だった難民数は2020万人となり(2015年6月末時点) 1992年以降最多となった。庇護申請者数は99万3600人で、2014年の同時期と比べ78%増加した。また国内避難民の数は約200万人増加し3400万人になったと見積もられている。

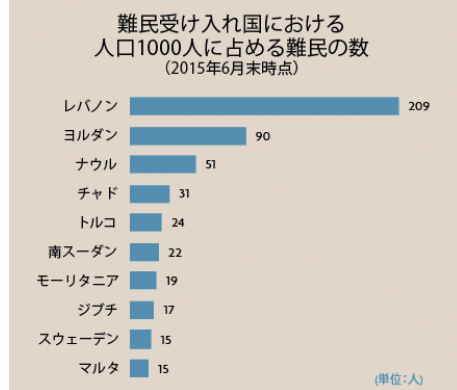


© UNHCR/C. Tjierina



報告書に反映されている国内避難民のデータは「UNHCRが支援している国内避難民数」のみであるが、2015年に家を追われた人数が初めて6000万人を上回る見通しだ。これは122人に1人が移動を強いられたことを意味する。

故郷へ帰還することができた難民の数は8万4000人と過去30年で最も低かった。避難生活が長期になるにつれ、難民受け入れ国にとっての負担は大きくなり、難民に対する不満が増し、政治問題として難民が語られるようになる。このように様々なリスクが伴うという側面があるものの、2015年上半期は各国によって寛大な受け入れがなされた期間でもあった。UNHCRのマンデート(委任権限)に基づいた統計ではトルコが最大の難民受け入れ国であり、6月30日時点で184万人の難民を受け入れている(パレスチナ難民はUNRWAの支援対象者であり、今回の統計には含まれない)。レバノンは、総人口に対する受け入れ難民数が最も多く、レバノンに住む1000人に209人が難民である。



地中海を渡り、欧州を目指す人は、主に2015年下半期に急増したため、この報告書には反映されていない。各国における庇護申請者数を見ると、2015年上半期、ドイツが最も多く庇護申請を受ける国となった。

(2015年上半期、下半期を合わせた統計「年間統計報告書 (Global Trends)」は2016年6月末発表予定)

シリア危機に対する日本の支援



©UNHCR/S.Tarling

生後7ヶ月の男の子マタルはレバノン生まれ



©UNHCR/B.Diab

小規模ビジネス助成事業の助成を受けたイクバル



©UNHCR/M. Prendergast

エルビルで現金の給付支援の手続きを行うシリア難民

【レバノン:命をつなぐ支援】

レバノンでは100万人以上のシリア難民が避難生活を送っている。シェルターを確保し、衛生環境の良い場所で健康を維持するのはシリア難民が直面する困難の1つである。UNHCRはレバノンで毎年5万5000件以上の難民の手術や治療費をカバーしているが、この活動に大きく貢献しているのが日本だ。日本からの支援は集中治療室での処置が必要なシリア難民の赤ちゃんの入院費や治療費にも充てられている。

【シリア国内で小規模ビジネス支援】

UNHCRはシリア国内で避難民の保護や支援活動を行っている。シリア南部のスイダー県に避難していたイクバルは、1人で仕事を探し、家賃を払い、2人の子どもたちを養わなければならなかった。そんな時、UNHCRの小規模ビジネス助成事業の助成を受けることが決まり、パン屋を開くことができた。日本からの支援はこうしたシリア国内の小規模ビジネス助成事業などにも役立てられている。

【イラク:現金の給付支援】

UNHCRはイラクのクルディスタン地域の難民と国内避難民の家族に、審査の上、現金の給付支援を実施している。必要最低限の生活を支えるための現金の給付支援は、個人のニーズに合わせて使いみちが決められるため、効率的かつ効果的な支援となり得る。また難民、避難民の受け入れコミュニティ全体に恩恵をもたらす。日本政府からの支援により、2015年にはイラクにいる難民の家族3157世帯と国内避難民の家族1万世帯に現金の給付支援を実施することができた。

学生だからできる難民支援 「J-FUN ユース」代表 酒師麻里さん

J-FUN ユースの活動について教えてください

J-FUN ユースの活動は2007年6月20日世界難民の日に「UNHCRユース」という名称で発足しました。難民問題や人道支援に対する学生の関心の高まりと学生らしさを難民支援の現場に生かしたいという想いから結成されました。そして2009年6月に新たに「J-FUN ユース」と名称を変え再スタートを切りました。J-FUN ユースが目指すことは大きく分けて2つあります。1つは「難民を取り巻く社会の状況を良くすること」。そしてもう1つは「将来社会で活躍する人々の学びの場となる」ことです。現在所属しているメンバーは20人ほど。大学生が中心ですが、高校生が参加することもあります。具体的な活動は主に4つあります。

- (1) 難民や避難民、無国籍者に関する勉強会「ユースデー」
難民問題をはじめとした様々な社会問題に関する勉強会を月2回行っています。
- (2) 日本で生活している難民の子ども対象の「学習教室」
毎週土曜日、日本の学校に通う難民2世の子どもたちを対象に学習教室を行っています。
- (3) 「世界難民の日」に向けたイベントの企画、運営
毎年6月20日「世界難民の日」には様々なイベントを企画しています。

(4) SNSなどで情報発信「時事deなんみん」
J-FUN ユースのメンバーが気になった難民問題に関するニュースなどをフェイスブックなどで発信しています。

酒師さんがJ-FUNユースに入ろうと思われたきっかけは？

友人が難民2世の子どもたちの学習教室へ行くのに一緒について行きました。その時に初めて、ニュースで聞いていた難民と呼ばれる人が日本にいることを知りました。「なぜ自分は今まで日本に難民がいることを知らなかったのか」と思うと同時に、もっと知りたい、日本にいる難民の方にできることをしてみたい、と思うようになりました。これがJ-FUN ユースに入ったきっかけです。

記事を読んでいる人へのメッセージ

難民問題と聞くと、どこから手をつけていいかわからなくなってしまうかもしれません。でも、難民問題への取り組み方は意外と身近なところにあるのではと思います。難民に関するニュースを友人とシェアするのも、難民のことを広める活動のひとつです。自分ができる範囲でアクションを起こすことによって、遠いところで起きている難民問題がぐっと身近に感じるかもしれません。学生である私たちには時間があります。その特権を生かし、自由に学び、行動を起こしてもらえたらと思います。もし難民問題に関心があったら、J-FUN ユースの活動に参加してみるのも行動を起こすことの一つになるかもしれません。

MARI SAKASHI

東京女子大学国際社会学科在学中。偶然、日本で暮らす難民と出会ったことをきっかけに、難民問題に関心を持ちJ-FUN ユースに加盟。難民問題を、学生をはじめ幅広い年代に知ってもらいたいという思いで活動をしている。



©UNHCR

ユニクロ

全商品リサイクル活動

UNHCRとグローバルパートナーシップを結んでいるユニクロ(株式会社ファーストリテイリング)は、服を必要としている世界中の人に衣料を届けるため「全商品リサイクル活動」を行なってきた。2015年はアフリカ9ヶ国を対象にした「アフリカに300万着届けよう」キャンペーンを行ない、300万着以上の服が寄せられた。



ウガンダでの衣料寄贈 ©UNIQLO

“届けよう、服のチカラ”プロジェクト

“届けよう、服のチカラ”プロジェクトとは、小、中、高校生が主体となって、着なくなった服を回収して、難民など世界中で服を本当に必要としている人に届ける活動だ。活動のはじめにユニクロの社員が講師となって「服のチカラ」について出張授業を行い、その後、子どもたちが校内・地域へ協力を呼びかけ、服を回収・発送している。



©UNIQLO

難民映画祭

大学パートナーズ始動

2015年10月～11月に東京と札幌、仙台で開催した第10回UNHCR難民映画祭。今回は10周年を記念して、「UNHCR難民映画祭 大学パートナーズ」を開始した。

日本において難民問題の教育・啓発活動に欠かせない大学機関と連携し、映画の上映を通じて世界中で紛争や迫害によって家を追われた難民・避難民について理解を深める目的で行われた。

今回は関東、北海道、関西の大学9校で、各大学の教員や学生が中心となりUNHCR難民映画祭で上映された作品の上映会が行われた。パンフレットや会場運営、ゲストトークなど、各大学の個性が光る上映会となった。



▲上映会も無事終了。みんなで集合写真!(国際基督教大学) ©UNHCR



▲作品の背景が書かれている手作りのパンフレット (明星大学) ©UNHCR



▲大学による難民支援の説明 (鶴見大学) ©UNHCR

